

史跡西寺跡・唐橋遺跡 報道発表資料

所在地：京都市南区唐橋西寺町

調査機関：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

調査期間：平成 30 年 10 月 1 日～ 11 月上旬（予定）

調査面積：約 114 m²（34 次調査）・約 120 m²（35 次調査）

調査要因：西寺跡範囲確認調査（文化庁国庫補助事業）

■ 西寺年表 ■	
796 年頃	造宮開始
813 年	金堂等の主要堂舎完成か
832 年	講堂完成
882 年	五重塔の造宮開始
990 年	西寺焼亡
1233 年	五重塔焼失。以後再建されず。

1. はじめに

西寺は、平安京遷都（794 年）に伴い、国家鎮護のために東寺とともに造られた国宮のお寺です。平安京の南辺にあたる九条大路に南大門を開き、その範囲は東西二町（約 250m）・南北四町（約 510m）に及びます。大正 10 年（1921）にコンド山を中心に国の史跡に指定され（現唐橋西寺公園一帯）、その後の発掘調査で、南大門、中門、僧房、食堂等が確認されたため、昭和 41 年（1966）に周辺部分が追加指定されました。これまでの発掘調査成果から、朱雀大路を挟んで東寺とほぼ左右対称の伽藍配置であることがわかってきました（図 1）。

今回の調査は、西寺跡 34・35 次調査に当たります。34 次調査は、西寺西限の確認が目的です。35 次調査は、史跡西寺跡保存活用計画策定に向けて、講堂跡等の範囲確認調査を 3 箇年計画で進めており、今年度はその 1 年目となります。今回は、伽藍復元図に基づき、講堂基壇の確認を目的として調査を実施しています。

2. 見つかった主な遺構

34 次調査

1 区（写真 1・図 2）

西寺西築地犬行 いぬぼしり 調査区の東側で確認した西寺西築地（西大宮大路東築地）の犬行です。小さな礫が敷き詰められ、非常に硬く締まっています。礫敷の上には肩口にも礫を貼りつけた幅 0.6m、深さ 0.2m の南北溝があります。その位置から、築地西側の犬行と雨落ち溝と考えられます。

西大宮大路 調査区の西側で確認した礫敷きと側溝（溝 3）です。礫敷きは上下 2 層に分かれ、下層には細かい礫、上層には一回り大きい礫の中に瓦・土器などが混ざります。敷かれた礫が揃っていないこと、凹凸が認められることから、路面そのものではなく、道路を作る際の地盤改良と考えられます。側溝は幅 2 m、深さ 0.2m で、埋土には水が溜まっていた痕跡が認められ、平安時代前期の瓦が出土しています。

2 区（写真 2・図 3）

西寺西築地内溝 うちみぞ（溝 1） 調査区の中央から東側で確認した南北溝です。幅 4 m 以上、深さは 0.3m あり、西寺西築地の内溝にあたります。築地の痕跡は残っていませんでしたが、溝の肩からは多量の瓦が出土しており、瓦葺の築地が存在したことが明らかとなりました。内溝は 9 世紀後半には埋められています。

鑄造関連遺構 2 いがた ろへき どうさい 調査区北側で確認した土坑です。一辺が 2 m 以上ある方形の土坑で、上層には鑄型や炉壁・銅滓などが廃棄され、下層には粘土が敷かれています。銅滓や炉壁が出土したことから、銅の鑄造に関する遺構です。内溝を埋めた後につくられていることから、9 世紀後半以降に成立したと考えられ、境内に鑄造関連施設があったことが明らかになりました。

鑄造関連遺構 3 鑄造関連遺構 2 の東側で確認した土坑です。調査区の外へと展開していたため平面形は不明です。炭化物や粘土が破棄されており、鑄造に関連する遺構と考えられます。

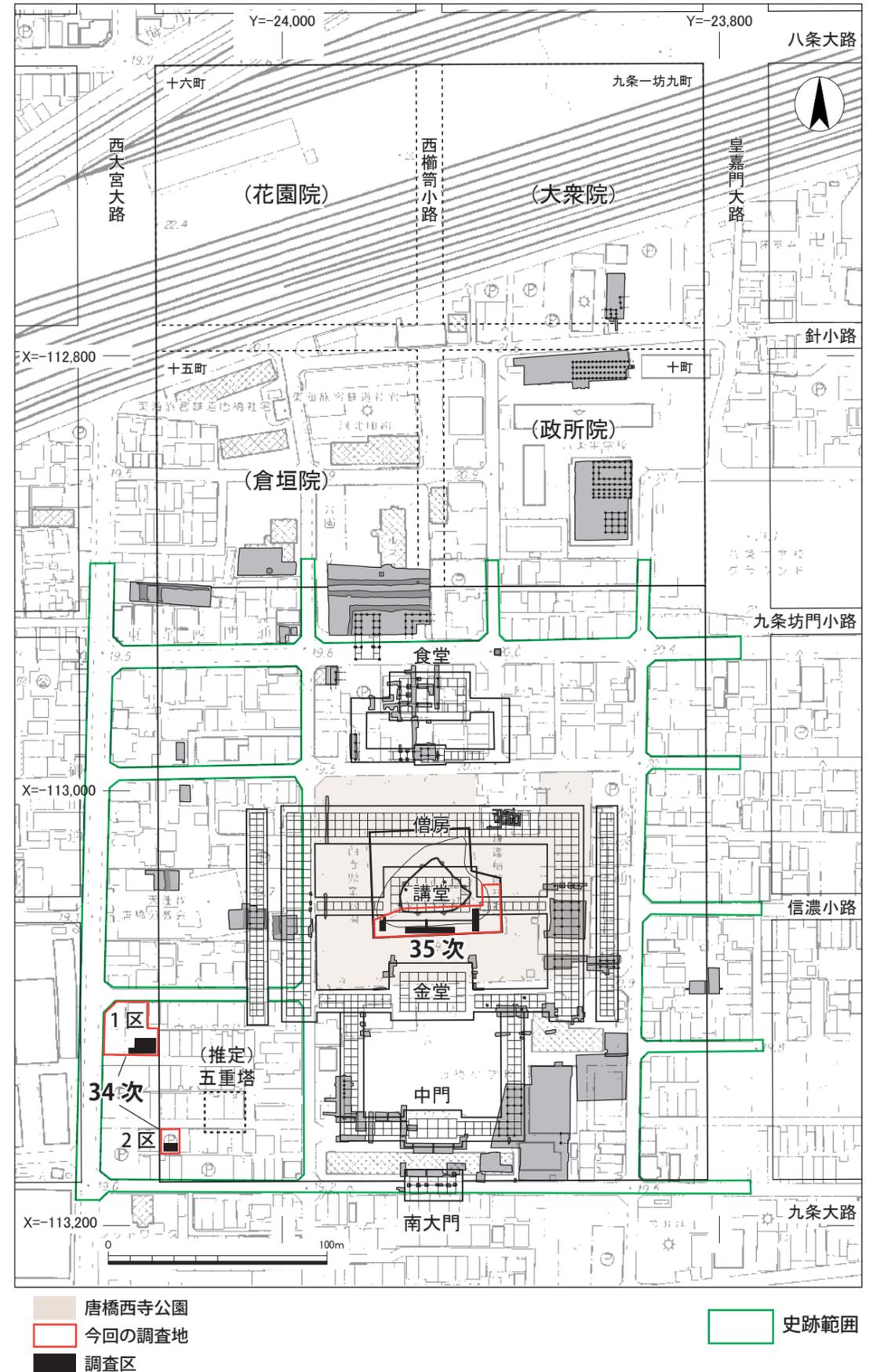


図 1 西寺伽藍復元図と調査位置図



写真1 34次調査1区全景（北西から）



写真2 34次調査2区鑄造関連遺構（南東から）

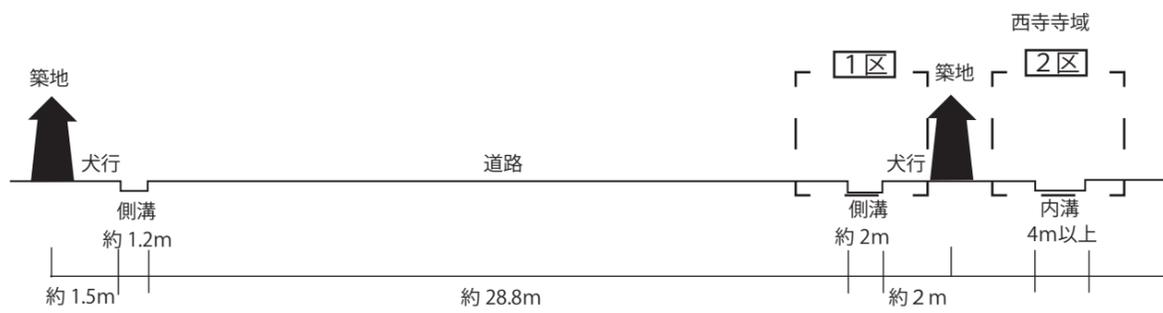


図2 西大宮大路と西寺内溝想定図
 (※側溝・犬走・内溝の規模は発掘調査成果に基づく)

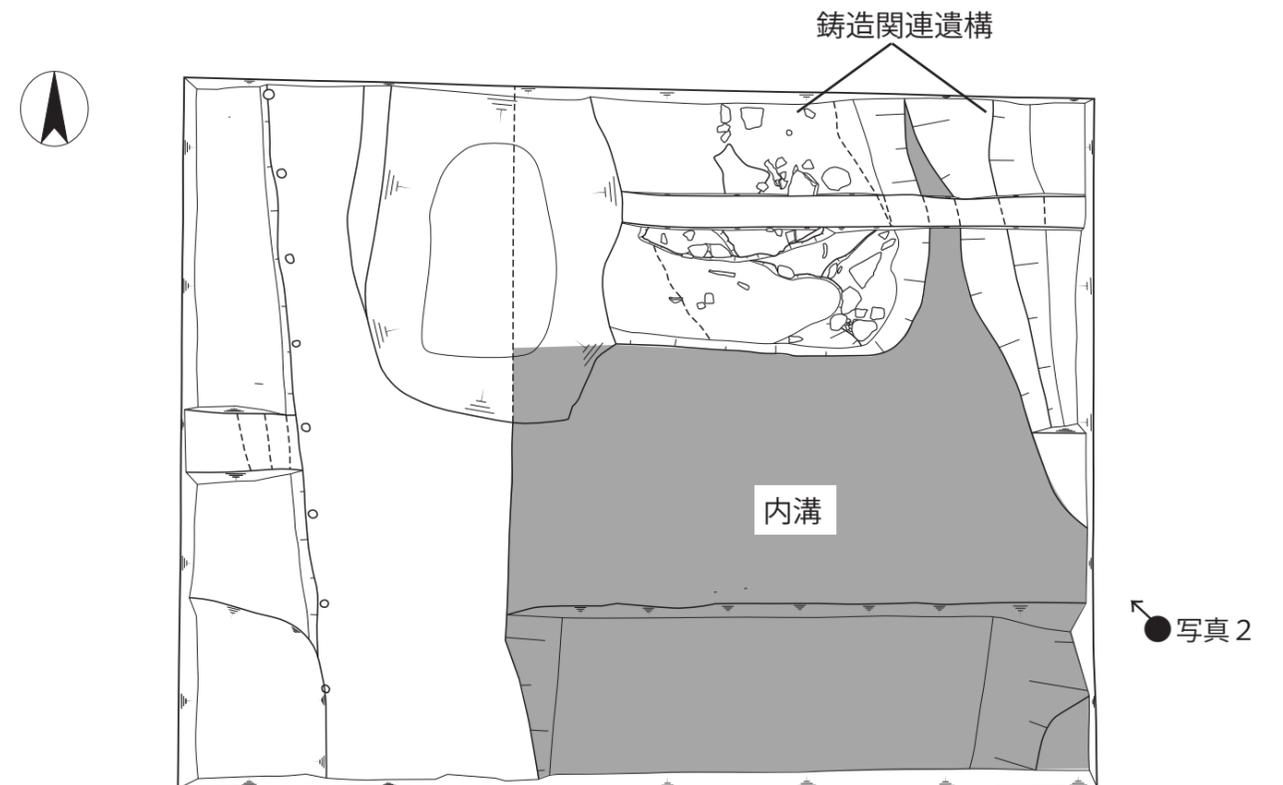


図3 34次調査2区平面図



35次調査 (図4・写真3)

講堂 2区にて基壇土及び正面階段を確認しました。基壇土は拡張区北端で認められた砂礫層で、高さ 40 cm分が残っています。正面階段は、講堂中央間に設けられた部分で、階段の出は 1.5mになります。階段に用いられた凝灰岩は全て抜き取られています。石を抜いた溝には、多量の焼土が含まれることから、火災で焼失した直後に抜き取られたことがわかりました。

焼土層 2区の全面を覆う厚さ 5 cmの整地層で、焼土を多量に含んでいます。出土した土器から、^{しょうりゃく}正暦元年 (990) の「西寺焼亡」(『日本紀略』)の火災後の整地層と判断できます。この整地層は、階段の凝灰岩抜き取り溝を覆うことから、講堂は火災で焼失した後、再建されなかったと考えられます。

参道 2区正面階段前面に敷かれた礫敷きです。小礫が敷き詰められ、非常に硬く締まっています。一部の確認に留まるため規模は不明ですが、講堂中央間前面に広がることから、講堂と金堂を繋ぐ参道と考えられます。

コンド山 現在残されている小丘は、講堂跡の名残であることを改めて確認しました。しかし、本来の講堂基壇高よりも数倍の高さとなっていることが明らかとなりました。盛土には、多量の瓦とともに寛永通宝が出土しており、江戸時代に講堂周辺の耕作化に伴い、不要となった瓦等を講堂跡に盛り上げたことがわかりました。

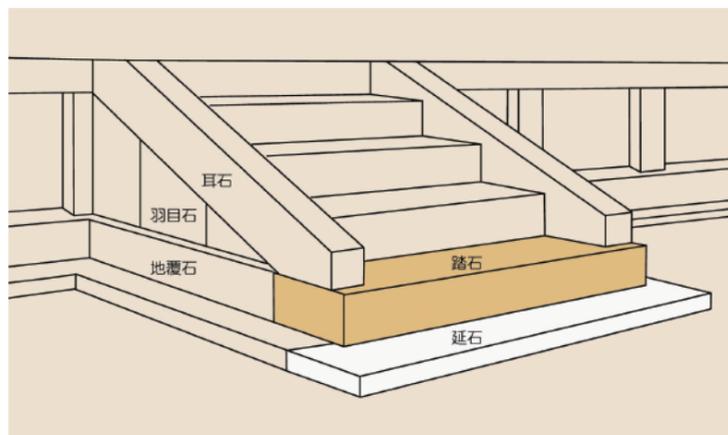
3. 今回の調査成果について

34次調査では西寺西築地の内溝を確認したことによって寺域の西限が確定しました。また、内溝は9世紀後半には埋められ、銅製品を生産する鑄造施設が作られています。調査で確認した鑄造関連遺構の年代や、その詳細な性格は不明ですが、西寺造営に必要な製品の生産を行っていた可能性が指摘できます。

また、西大宮大路に関連する礫敷きを確認しました。犬行にまで礫敷きを施す事例は少なく、西寺の存在を強く意識した施工であると考えられます。大路の路面下の地盤改良についても、複数回にわたって丁寧に作られており、長らく使用されていたことが明らかとなりました。東寺とともに、官寺である西寺の格式の高さを示すものとして貴重です。

講堂跡については、今回の調査で初めて講堂の痕跡を確認することができました。これまでの発掘調査成果に基づく西寺伽藍復元図では、講堂は東寺講堂よりも1間分(約 4m)南に配置されていましたが、今回確認した講堂基壇土の南縁は、東寺講堂基壇南縁とほぼ同じ位置にあり、西寺と東寺が同一の伽藍配置であることを考古学的に裏付けることができました。また、階段に使用されていた凝灰岩の抜き取り溝から出土した焼土や焼土層の存在は、正暦元年(990)の西寺焼亡に比定でき、この火災によって講堂が焼失し、凝灰岩が抜き取られたことが判明しました。

一方で、現在のコンド山の高まりは、講堂周辺の耕作地化に伴い、江戸時代に瓦等を積み上げたものと判明しました。松尾祭にて神輿がコンド山に担ぎ上げられることから、コンド山が大切にされていたことが伺えます。この盛土によって、講堂の基壇土は良好に残されていることがわかり、来年以降、講堂の建物跡の確認調査を進めていく予定です。



参考:階段模式図

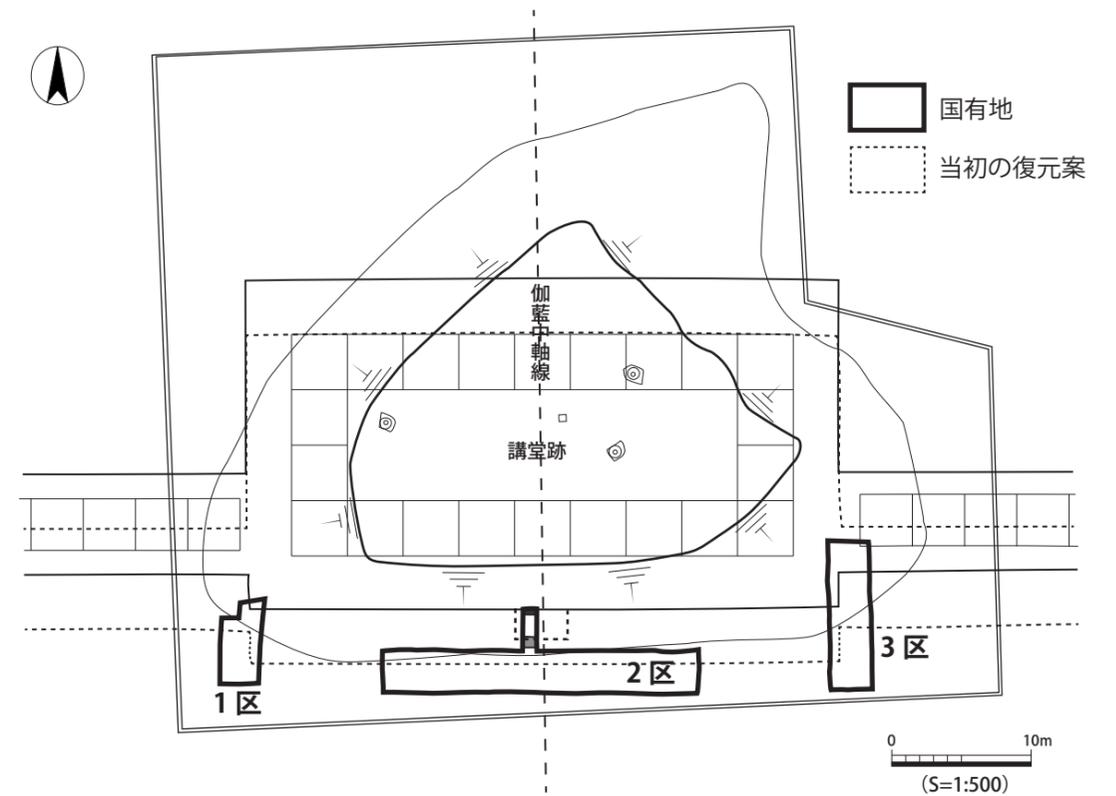


図4 35次調査平面図



写真3 講堂正面階段と参道礫敷き (南から)